

## 親鸞聖人における社會觀の構造

柏 原 祐 泉

近時の歴史學の側からの親鸞聖人に對する研究課題の一は、護國意識や社會的實踐などの問題を分析することにより、聖人が既成教團や社會に對し如何に對應したかという、その時代社會との交渉關係の問題に集注している。しかし、建仁元年に本願に歸して以後、われわれに具體的に姿を示す聖人の立場は、あくまで純教法的な他力的信を基盤とする報佛恩の精神により終始一貫されるものである。この超歴史的な立場が、もつとも明確にうち出されたのは、いうまでもなく教行信證においてである。そこでは佛法と世法とが截然と區別され、佛法は現實の社會關係や政治・權力關係になんら拘束されていない。したがつてその製作の背景に何らかの現實的、政治的意味を見出そうとする見解には賛同し得ない。

しかしながら、晩年の關東における教團的動搖や善鸞事件を介して、正像末和讃・御消息集などにはかなり具體的な既成教團や社會に對する批判があらわれ、歴史的な展開を示すようになる。そしてそれは、教行信證・淨土和讃(特に初稿本)・高僧和讃の正像千五百年説から、太子和讃(七五首)・正像末和讃の正像二千年説へと變化する最も具體的、時代的な聖人の末法觀により支えられている(拙稿「親鸞における末法觀の構造」大谷學報三九―二、参照)。そして、この批判は以後においてより深まり、より具體化してゆく。しかしこの場合の社會・教團

批判も、基本的には教行信證以來の他力的な報佛恩の立場に基くものであつて、これを聖人の社會觀の基本構造としてとらえなければならぬ。ただ關東教團動搖・善鸞事件以後においては、それまでの超歴史的な他力的信の立場が歴史的な場において限定され具體化されてくるのである。この面から特に聖人の現實的、社會的な實踐性と、時代に對する對決の仕方とが出てくるといえるのであるが、この間の具體的論證については他日を期したい。

## 宗祖歸洛についての一考察

佐々木 蓮 磨

一

宗祖歸洛の理由については、學者によつていろいろな説が立てられているが、私は聖覺に會うということが一つの大きな理由ではなかつたかと思う。それは、宗祖が寛喜二年の五月二十五日(五十八歳)聖覺の唯信鈔を始めて筆寫され、翌三年四月四日にかの有名な寛喜の内省があり、引きつづき歸洛されている事實と、歸洛後、聖人の上に聖覺が大きく現われてきた事實とによるのである。

先ず唯信鈔の披見と寛喜の内省につき、宗祖が唯信鈔によつて、異常な啓發を受け、晩年は唯信鈔を選擇集の正しき祖述と見、聖覺を恩師法然の後身と仰いで、行かれたことは事實である。そうした觀點からすると、唯信鈔の披見は、宗祖にとつては吉水入室に次ぐ精神的な轉機と見てよからう。宗祖が唯信鈔

によつて啓發を受けられた點は恐らく願力無窮と唯信獨達の義であつたと窺われる。それは銘文の「コノ本願ノヨウハ唯信鈔ニヨクヨクミエタリ」の語や、また、唯信鈔文意に「如來ノ弘誓ヲオコシタマエルヨウハ、コノ唯信鈔ニクハシクアラワレタリ」の語、ならびに歎異抄の「唯信鈔ニモ、彌陀イカバカリノ力マシマストシリテカ、罪業ノ身ナレバスクワレガタシトオモウベキ」とある語と、銘文の「唯信トモウスハ、スナワテコノ眞實信樂ヲヒトスジニトルココロヲ申スナリ」の語が、唯信鈔ノ「信心ヲ要トス、ソノホカオバカエリミザルナリ」の語と、内意において全く一致するからである。

次に寛喜の内省は、建保二年（四十二歳）の三部經讀誦の反省と、一見同じように見えるのであるが、實は大きな相異がある。建保二年の反省は衆生利益のために三部經を讀誦する行業が誤りであつたと氣づかれたもので、その後は自信教人信の報恩行で十七ヶ年を貫き、讀誦廻向の過誤に陥られなかつたのであるが、寛喜三年（五十九歳）の内省は讀經廻向の反省でなく、執心自力の執拗さに對する内省なのである。そしてこの内省を促したものが聖覺の唯信鈔ではなかつたかと窺うのである。行業の反省は易いが内心に潛む自力執心の反省は容易でない。これを爲さしめるためには善知識の教に遇うということが重要な役割をと思う。關東教團も一應形がととのい、マンネリ化の傾向を見せ、宗祖自身も人師として仰がれるようになってきた矢先きに唯信鈔の願力無窮と唯信獨達の力強い教説によつて内心に潜在する自力執心が昔も今も何等變るところがなく、むしろ自力廻向の讀誦三經を止めたと思つていたことが大きな誤

りであつたということに氣づかれたものではなからうか。この驚きが潜在意識を夢の中に現わし、而もそれに對して深刻な内省となり、どこまでも善知識を追うという聞法の旅に踏み切られたものではあるまいか。何といつても宗祖の一生を貫くものは燃ゆるが如き若々しい求道聞法の精神である。そして、それが宗祖の生命ではなかつたであらうか。かく宗祖を仰ぐとき、關東教團に於ける人師の位置をかなぐり捨てて聖覺を知識と慕い京洛の地に向われたと解釋することは、宗祖の精神を生かすことではないかと思う。私は以前、悲歎述懐和讃の「是非シラズ邪正モワカスコノミナリ、小慈小悲モナケレドモ、名利ニ人師ヲコノムナリ」を證とし、人師と仰がれることに堪えかねて歸洛されたものであらうと窺つてきたものであるが、それだけでは消極的で隠棲と見られるきらいがある。ところが、六十に垂ん垂んとする老齡に及んで、道友の書物に感激し、友を師と仰ぎ、ひたすら聞法の道に踏み出されたと窺えば、極めて積極的な面が現われて、いかにも宗祖にふさわしい感じがすると思う。

## 二

こうした見方を傍證するものは、宗祖が晩年、聖覺を恩師同様に敬慕し、全面的に信賴しておられた事實である。先ず唯信鈔の筆寫が記録に出ているもののみでも六回、殊に最後のものは、御往生の直前弘長二年十月九日に筆寫されている（學的には問題にされているが）。また唯信鈔文意も記録に残つてゐるもののみで、四回筆錄されている。また唯信鈔を門侶に奨めておられること七回、而も、それについて「ソレソコソノ世ニト

リテハ、ヨキヒトトノニテサフラヘバ、ソノフミドモニカ、レサフアラフニハ、ナニゴトモノスグベクモ候ハズ。法然上人ノ御オシヘヨヨク御コ、ロヘタルヒトノニテオハシマシサフラヒキ」と、極めて信頼に満ちた言葉を附け加えておられるのである。

また、聖人のつねの言葉として覺如上人は「信誘トモニ因トナツテ、同ウ往生淨土ノ縁ヲ成ズ」という一語を擧げておられるが、これは唯信鈔の「信誘トモニ因トシテ、ミナマサニ淨土ニムマルベシ」を承けられたものであり、唯信鈔文意や一多證文意の卷末の「コ、ロアラフニヒトハ、オカシクオモフベシ、アザケリヨナスベシ」の附言は、唯信鈔の最後に「コレヨミン人、サダメテアザケリヨナサンカ云々」とある語と相い通ずるものである。次に、正像末和讃の「願力無窮ニマシマセバ、罪業深重モオモカラズ、佛智無邊ニマシマセバ、散亂放逸モステラレズ」は、唯信鈔の「佛力無窮ナリ、罪業深重ノ身ヲオモシトセズ、佛智無邊ナリ、散亂放逸ノモノオモスツルコトナシ」の語を承けられたものであり、「無明長夜ノ燈炬ナリ、智眼クラシトカナシムナ、生死大海ノ船筏ナリ、罪障オモシト歎カザレ」と「如來大悲ノ恩徳ハ、身ヲ粉ニシテモ報ズベシ、師主知識ノ恩徳モ、骨ヲクダキテモ謝スベシ」の二首は、聖覺の法然聖人佛事表白文の「誠知無明長夜之大燈炬也、何悲<sup>ニ</sup>智眼闇<sup>ニ</sup>、生死大海之大船筏也、豈煩<sup>ニ</sup>罪影重<sup>ニ</sup>」と、「情思<sup>ニ</sup>教授恩徳<sup>ニ</sup>、實等<sup>ニ</sup>彌陀悲願<sup>ニ</sup>者歟。粉<sup>ニ</sup>骨<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>報<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>、推<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>謝<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>」とある語によられたものであることは明らかである。また宗祖が晩年の御消息の中に師法然に對しては、いつも大師聖人の敬語を使

つておられるが、この敬語も聖覺の表白文に「大師聖人同學等云々」とあるのを承けられたようである。かように宗祖独自のものとして考えられた感銘深き和讃や法然上人への敬語が、聖覺から出ていることを知つて、今更の如く驚くのである。

その他、尊號眞像銘文には、師法然の次に他師に比べて最も長文の銘文が掲げられていることも注意すべきである。殊に聖覺に對しては、「聖覺和尚ノタマハク」とか「聖覺和尚ノタマヘルナリ」という、全く恩師に對する敬語が使われている。また初期教團の光明本尊には師法然の次に聖覺が載せられている。これは聖覺を敬慕された宗祖の精神が、初期教團に反影していた證據であろう。

要するに、宗祖の一生を貫く求道問法の態度と、晩年に聖覺を恩師の如く敬慕された事實とを腕み合せ、且つまた唯信鈔見寫の翌年に自力執心への内省があり、引きつづき歸洛された事實を思い合わすとき、宗祖の歸洛はひたすら善知識を慕い、専ら問法のために旅立たれたと見るのも強ち無理ではなからうと思ふ。

### 正信偈和讃の開版に就いて

佐々木 求 巳

巷間に、淨土眞宗が隆盛になつたのは、正信偈和讃と、御文と御傳鈔の力だと言ふ傳へがある。左程までに淨土眞宗と正信偈和讃は切り離す事が出来ないが、その出版に關しては案外に調査されてゐない。小生はここ數年文明五年の蓮如開版以來、